

エリゼ・ルクリュ著，柴田匡平訳
『ルクリュの19世紀世界地理 第1期セレクション
5 南ヨーロッパシリーズ総説，ヨーロッパ総
説，バルカン半島，イタリア，コルシカ，スペイン，
ポルトガル』

古今書院 2018年9月 1,002頁 28,000円＋税

第1期セレクション最後となる本シリーズ第5巻¹⁾は，原著『新世界地理—地球と人間—』の初巻(1875年刊行)にあたる。「訳者あとがき」の教えるところによれば，1887年に本巻の増補改訂版が刊行されているが，本書は初版の翻訳である。本巻の章構成は下記の通りとなっている(括弧内の頁数は訳書のもの)。

- 第1章 シリーズ総説 (7頁)
- 第2章 ヨーロッパ総説 (27頁)
- 第3章 地中海 (20頁)
- 第4章 ギリシャ (78頁)
- 第5章 ヨーロッパ・トルコ (121頁)
- 第6章 ルーマニア (33頁)
- 第7章 セルビアおよびモンテネグロ (22頁)
- 第8章 イタリア (338頁)
- 第9章 コルシカ島 (15頁)
- 第10章 スペイン (267頁)
- 第11章 ポルトガル (70頁)

なお，第8章にはサンマリノ・ヴァティカンとマルタ(当時，イギリス領)，第10章にはアンドラの記述が含まれる。

本巻冒頭には「発刊の辞」がおかれ，「無謀な企て」にみえる世界地誌発刊の「試みを正当化」している。すなわち，近年の「科学的成果」が「あまりに多数かつ重大」なため，マルト＝プランが1820年代に著した世界地誌の内容が古くなったこと，また「自然は，それが育む人間たちとともに，絶えず変化」するため，「流転のうちにある」万物に関する「およその知識を提示し，原初環境と，変化しつつある環境の両者の記述に努める」重要性を，『地球』『大地』と訳されることもある…訳注(以下同様に表記)・『新世界地理』(本シリーズ)・『地人論』と続くルクリュ三部作の位置づけとも絡めて述べている²⁾。「発刊の辞」をしめくくる「我々全員を載せる地球上で，兄弟と

して暮らすのはよいものであろう」との一文は，人工衛星から眺めたかのような「宇宙のなかの地球」の挿画(2頁)と合わせ，コスモポリタンとしての彼の本領を遺憾なく発揮している。

これをうけた第1章では，執筆時点で世界地誌を「悉皆的に記述するのは不可能」であり，「我々の時代では，孤立した作業者が一幅の素描に挑むしかできない」と記している。その理由として，地表やそこに住む人間に対する当時の知識不足による誤謬と合わせ，異なる人種や民族に対する偏見によって，「我々はしばしば実像とは別物に目を向ける」ことをあげる。「彼らのほんとうの様相を看取するには，まずあらゆる先入観と，諸民族をいまでも分断する侮蔑，憎悪，恐怖の念を振り払わねばならない」(3-4頁)という指摘は，今なお重い。その上で，「おそらく唯一，全域が踏破され，科学的探査がなされており，物産の一覧がほぼ完了し」，その住民が「産業と思潮の営みにおいて，他の人類に刺激を与える存在であり続けている」ヨーロッパから記述を始めるとしている。しかしながら，「民族や人種の混交」などが進めば，「地球上は，ひとびとが「文明」と呼ぶ代物の「中心は到る所に，周縁はどこにもない」状態に至るだろう」(4-5頁)との見通しを披瀝している。記述に際しては，「歴史地理学や統計地理学」が「周囲の環境に働きかける積極的な役割を担い，それを克服した人々」に着目してきたことに留意し，時間の経過とともに人々にとっての自然環境の意味が変化し続けていることを重視している³⁾。まさに「空間を研究するには，それと等価のもうひとつの要素，時間も考慮せねばならない」(6-7頁)のである。

第2章では，まずヨーロッパの範囲に関するストラボンなどの説が検討に付される。ルクリュ自身は，ヨーロッパとアジアの境界を，マヌイチ川(河谷)やオピ川を含む低地帯に設定している(11-12頁)⁴⁾。地形に関しては，「出入りの激しい海岸線」が水上交通の面でヨーロッパに優位性を与えたことに注目し，このようなヨーロッパの海岸線への着目は，中国のそれとを対照させてヨーロッパの優位を論じたジャレド・ダイヤモンド⁵⁾にも通じるものがある。ただし，ギリシャからイタリア・イベリア半島・オランダ・イギリスへとという覇権の変遷を追った上で，「米国人が予言す

るように、おそらく文明は西進を続け、合衆国のなんらかの都市がロンドンに取って代わるだろう」と予想し、「地理的特徴の有用性が、歴史の流れのなかで少しづつ変化すること」(19-22頁)を意識したルクリュは、単純な環境決定論的立場を免れているといえよう。「人種と民族」の節では、当時の「勢力均衡」が「交戦権と、対立する野望に立脚するものなので、不安定は必然」であり、「真の均衡が達成されるのは、ヨーロッパ大陸の諸民族が自らの運命を自分たちで決められるようになり、征服する権利をもつのだと言いつづことをやめ、隣人と自由に連合し、共通の利益の管理運営にあたる時のみである」(33頁)と、20世紀の両大戦からEU統合に至る過程を見通していたかのような記述がみられる。

「ギリシャとそれに随伴する諸島の例は、地中海のざわめく波浪が歴史の発展に及ぼす重要性が、人間の暮らす陸上よりも甚大だった証左である」から始まる第3章「地中海」では、次いで「沼のまわりの蛙のように、我々は全員がこの海のほとりに座っている」というプラトンの言(35頁)⁶⁾が引かれる。同章と続く第4章「ギリシャ」の記述では、訳者のいう「ロマン主義的な嗜好」が濃厚で、ギリシャ神話やホメロス・ヘロドトスなどがたびたび引用されている。1870年にトロイア遺跡の発掘に着手したシュリーマンが、その前々年の1868年、オデュッセウスの故郷とされるイタキ島(イオニア諸島)を訪れ、「全人類のうち最も高徳な人々で、自らに固有な美德であることも知らず、お互いに一切の悪意を抱かない」(119-120頁)と島民たちを描写したことも引かれている⁷⁾。

第7章までは、南東ヨーロッパに属する地域が扱われる。19世紀後半のバルカン半島⁸⁾は、オスマン帝国の退潮にともない、諸国家が独立へ向かった時期である。すでに1829年にギリシャは独立していたが、クリミア戦争(1853~56年)や露土戦争(1877~78年)を経て、ルーマニア・セルビア・モンテネグロの独立がサン＝ステファノ条約およびベルリン条約(いずれも1878年)で国際的に承認され、ブルガリアはオスマン帝国内の自治国となった。本巻執筆は上記両条約に先行するものの、ルーマニアとセルビア・モンテネグロは章立てされており、早くから自治的な性格が強かったことをうかがわせる。他方、ブルガリアの

ほか、クレタ島・マケドニア・アルバニア(現在のコソボを含む)・トルコ領スラヴ地域(現、ボスニア＝ヘルツェゴビナ)などは、「ヨーロッパ・トルコ」の章に収められている。

後に「ヨーロッパの火薬庫」と形容されることになるバルカン半島の民族的・宗教的な複雑さについては、随所でふれられている。例えば、アルバニアでは、トルコ支配下に入った15世紀前半に「残留した部族の大半はイスラームへの改宗を余儀なくされた」一方で、「両者ともオスマントルコに服属するなか、相互の憎悪は凄まじく、隸従を通じ相手方へ復讐し合う」カトリック教徒とギリシャ正教徒の確執もあった(194-195頁)。同様にボスニアでも、「16世紀初頭に、自分たちの封建的諸特権を保持すべくイスラームに改宗した領主たちが、「すぐにトルコ人ムスリムをしのぐ狂信性をそなえる」に至り、「キリスト教徒農民は、正真正銘の奴隷に落とされた」(209-210頁)。都市においてはさらに住民の多様性が増し⁹⁾、イスタンブール(コンスタンティノープル)(158-163頁)やエディルネ(アドリアノープル)(169-170頁)ではギリシャ人、テッサロニキ(サロニカ)(174頁)ではスペイン系ユダヤ人が優位を占めていた¹⁰⁾。当時トルコ領であったテッサリア地方では、イトスギやプラタナスを「樹陰のために」植えるトルコ人と、果樹やワイン用ブドウを「利益のために」植えるギリシャ人が対比され、「テッサリア地方のギリシャ人の最大関心事は、まさに彼らの分別と、高邁な野心を物語るもので、次代への教育に対する気配りだ」とえがかれている(181-182頁)。また、バルカン半島に多いツィガン人(ロマ)に関する記述も各所にあり、とくにルーマニア(273-274頁)やモンテネグロ(307頁)では小項目が立てられている。

民族の多様化は19世紀にも進行しており、クリミア戦争後のダブルジャ(ドブロジャ)地方(ドナウ河口域)には、イスラーム教徒のノガイ・タタール人やサーカシア(チェルケス)人が入植したが、その運命は過酷なものであった。反面、同地方に入ったロシア・コサックや「古儀式派」のロシア人は、「キリスト教徒であるエカチェリーナ2世よりも宗教に寛容」だったトルコ皇帝に受け入れられ、その入植地は繁栄した(232-234頁)。同時期、ギリシャ正教の側では、各地域の

政治的な独立と合わせて、ギリシャ・セルビア・ルーマニア・ブルガリアの教会がコンスタンティノーブルの総主教から独立・分離する動きがみられた。こうした動向は、オリエント各地のキリスト教徒に対するイスタンブール在住ギリシャ人¹¹⁾の影響力を減殺した(160-161頁)だけでなく、「スラヴ語住民にいつその凝集性を与え、ひいてはオスマン人支配者の不利益に転じざるを得ない事柄」として、「トルコ人にも強い打撃だった」(230頁)。

外部への出稼ぎないし移住も、各地で行なわれていた。「多くのギリシャ人が毎年国を離れ、コンスタンティノーブルやカイロ、さらには東インドに富貴を求める」結果、「ギリシャ人の共同体のうち最も豊かに繁栄するのが、まさに海外で成長するという奇妙な事実」があった(121頁)。かつて傭兵として「もっぱら戦うために故郷を後に」していたアルバニア人の間では、「冬の到来前に山地を後にし、遠く平地に赴いて手職にたずさわる」という「まっとうな労働による出稼ぎ」が増え(198-200頁)、ツルナ・ゴラ(モンテネグロ)人も、「平和な時代にはオスマン帝国すべての大都会に出稼ぎ」に赴き、コンスタンティノーブルでは「民族代々の仇敵」であるトルコ人と和気藹々に暮らしていた(307頁)。

ルクリュはオスマン帝国による支配について、「トルコ官僚の怠惰により、放任という最も単純な方策がとられている」ことにより、「トルコ国内における住民集団の自治は、各地で西ヨーロッパの最も先進的な国々よりも包括的である」との評価を与えている。そのようなバルカン半島を襲った帝国主義¹²⁾は、「岩山の古城に住むムスリムのパシャ{高官…評者注(以下同様に表記)}たちよりは、イスタンブールのトルコ政府に勤務するフランク人{西ヨーロッパ人}のほうが、しばしば臣民にとって煩わしい存在になる」(247頁)という状況を生み出していた。「トルコ財政はひどい状態」¹³⁾で、「ヨーロッパ列強によるシンジケート[借款団]が財政を切り盛りすべきだという提案もしばしばなされた」が、「ヨーロッパ列強のうち、どれだけが均衡財政を達成しているだろうか」(240-241頁)と反問している。クリミア戦争後にトルコ領となったドナウ河口を導流堤によって通船用に改良する工事も、「政治面での自

治と船団、旗、予算、そしてもちろん貸付と借入の権利をもつ国際シンジケート」によって実施され、「事実上はヨーロッパ諸国すべてに利するよう中立化」(224-225頁)された。政治的には独立を果たしたギリシャとて、その政府は「初期の外債の利払いが長期にわたり滞ったため」、「恒常的な財政破綻」(125頁)状態にあった。ギリシャの「地方公務員の相対的人数はヨーロッパのどこよりも」多く、「薄給とは申せ、全体では歳入の過半が彼らの給与に消える」(131頁)との記述は、すぐれて今日的でもある。中にはイオニア諸島がイギリスからギリシャに譲渡(1864年)されたような場合もあるが、「世界中の政府でこれに追隨した例はまだ少ない」し、「イギリス自身、地球上の多くの地点でこれを推進する機会は潤沢なはず」(114頁)であった¹⁴⁾。

19世紀は、西ヨーロッパ流の「国民国家」概念がバルカン半島に持ち込まれた時期でもある。しかし、この概念と多民族の現実との乖離は、いわゆる「東方問題」を惹起した列強の思惑とも相まって、各所で摩擦を引き起こしていた。例えばルーマニアでは、ドイツ系ユダヤ人が話す「崩れたドイツ語」が「ドイツ人の先触れのように感じられ」、「ユダヤ人による商業面の侵攻は、やがて自国の独立を崩壊させるもうひとつの侵攻の前兆ではないかと考える」(272頁)感情をもたらししていた。「ヨーロッパ・トルコの課題」の小項目では、その人口の約3分の1がムスリムであることを記し、「将来におけるバルカン半島での人種間の絶滅闘争などではなく、それが起きないことを希望」し、「現在すでに問題なのは、これら種々雑多にして、一部は敵対的關係にある民族要素が、平和と自由のうちに発展する方策を知ること」(245-246頁)であると強調されている。「近い将来に南スラヴィアの大連合の中核になると期待されているし、彼ら自身もその責務を自覚」していたセルビア人(287頁)は、後にその言葉通りユーゴスラヴィア建国の中心となるが、「絶滅闘争」を含むその解体過程はルクリュの希望に背く形となった¹⁵⁾。そもそもヨーロッパ文明の淵源とされる古代ギリシャが「とくに東方に目を向け、また光もそこから到来した」(58頁)こと、シリアからキティラ島(ペロポネソス半島南方)に持ち込まれた豊饒神信仰が「後代には、アフロディー

テの名のもと、全ギリシャ人の女神になった」(103頁)こと¹⁶⁾など、長く培われてきた交流と共存の知恵を振り返るべきときであろう。

第8章以下は、主にイタリアとイベリア半島の南西ヨーロッパが記述対象となる。頁数ではこの範囲が本巻の約7割を占め、同様に179葉の図版うち134葉、73点の挿画のうち52点がこの部分のものである。その中には、「アルプス山脈とアペニン山脈のあいだの平野における土砂の堆積」(326頁)、コモ湖の東西・南北の断面図(339頁)、ケントゥリア地割を示す「ローマ退役軍人の入植地跡」(355頁)のような比較的詳細な図も含まれ、著者が有する情報量に東西の格差があったことがうかがえる。

「今世紀におけるおける大きな政治的出来事のひとつになった」(315頁)イタリア統一(1861年)は、ルクレユのみるところ、「国政に携わる人々の才幹と愛国者の献身による以上に、鉄道と、それがもたらす新たな諸条件によるところ」が大きかった。すなわち、技術者が各地からの路線を「かつてローマ人が世界に向かう石畳の大街道の起点にした場所〔ローマ〕に連絡させたとき、すでにイタリアの統一は成っていた」(633頁)と、交通の条件を重視している。他方、南側斜面が急峻なアルプス山脈は「イタリア人にとってのみ本物の「障壁」であり」、北側ははるかに緩やかなために、「イタリアの幸運な気候と膨大な富に誘われた侵略者にとり、アルプスの峠を越えるのはさほどの難事ではなく、そこから平野までは一瀉千里だった」という中、「次々に田野に押し寄せた外国人勢力の酷烈な抑圧のもと、イタリア人は最後にはお互いを兄弟と認識するに至った」(317頁)と、自然的・歴史的条件をえがいている。

ローマ帝国とルネサンスは「史上最大の出来事のうち二つ」であり、「人類の生におけるふたつの年代において、このラテン系半島が世界に果たした卓越せる役目が、いかなる地理的な環境条件によるのか、その探究は重要だ」(311-312頁)と述べている。とくに古代文明に関しては、それ以降との対比において称揚されている。一例をあげると、「シチーリアの驚嘆すべき過去の遺跡と、後代のビザンツ、アラブ、ノルマン、スペイン、ナポリ人が建立した建築物との格差は甚大」で、「進歩とはほど遠いみじめな退歩である」

(582頁)との評価である。同島のシラクーザでは、ギリシャ時代の神殿の「美しい大理石の列柱は、悪趣味極まりない教会の、内壁の切り石や漆喰の下に塗りこめられ」てしまい、「遺跡は現存するのに、近代人はそれをもとに醜悪な建物を拵えた」(579頁)。「静穏な楽しさ」がみられるローマのカタコンベ(481頁)と、「このほかでかい造営物には、何かしら不完全なものが見てとらずにはおかない」と表現されるヴァティカンのサンピエトロ大聖堂(483頁)との好悪の差は、訳者もあとがきで指摘している。それは、リヴィエラを例外としつつ、「人間はあまりに多くの場所を醜くしてきた」(403頁)とする批判にも通じる。

ルネサンスについては、トスカーナ地方を扱う節で「人間性の真の再生であった」と高く評価され、フィレンツェ出身のアメリカ＝ヴェスプッチの名が新大陸の呼称になった要因を、「科学を科学そのものとして愛好した共和都市フィレンツェでは、種々の旅行記が最も多くの読者を見出したし、そのニュースも自由にヨーロッパに広まった」(433-435頁)点に求めている。ジェノヴァ出身のコロンブスは、「新世界の発見により近代史の幕を開ける栄誉を獲得した」が、同地出身のカボットとともに、「母国のために発見行を企てたわけではないのは本当で、彼らが指揮したのはイギリスやスペイン籍の船だったし、新大陸の富を分け合ったのも両国」(406頁)であった。「航海者や商業船団を通じ、ヴェネツィア自身が甚大な役割を果たした地理的大発見の数々は、このイタリア都市の勢威に決定的な打撃をもたらした」(396頁)と、自ら先鞭をつけた大航海時代の到来がイタリア諸都市の衰退を招くに至った歴史の変転が見通されている。

「かくも長期にわたり複数の国家に分断されたままだった」イタリア半島では、「各州の盆地や斜面の配置には、注目すべき多様性があった」(315-316頁)。東西の差異に関し、かつて古代ギリシャの影響が大きかった時代には、イオニア海沿岸の「オリエントに向く共和都市が、疑いなく西岸の市邑よりも優越した」が、やがて地形や大西洋との往来に恵まれた「アペニン西麓の田園が養う住民のほうが活動的で、知性に富み、政治的役割も大」(311頁)となった。ナポリの卓越性も、「同市が単にローマを向いていただけでな

く、スペイン、フランス、さらにはイギリスにも向いていた」(526頁)からであった。また、その位置ゆえに「ヨーロッパという偉大な有機体きつての活力をそなえる部分になるだろう」(386頁)と想定される北部と、教育水準が低く¹⁷⁾、「迷信」や山賊・児童売買が横行する南部とによる「南北問題」¹⁸⁾もすでに生じていた。もっとも、南部の盗賊が「聖母マリアや特別な守護聖人に誓いを立て、分け前を約束するし、事が成就したのちには、祭壇にうやうやしくそれを捧げ」ており、「大半が彼らなりに良心的であって、おそろしく信心深い」(520-524頁)ことも筆に止めている。なお、第9章収載のコルシカ島は、フランスが1768年にジェノヴァから買収し、「すでに3代にわたりフランス人との盟友関係」にあったが、「イタリア半島に続いては、おなじくティレニア海に洗う同島を記述するのが妥当」(647-648頁)として、本巻で記述される。

第10章で取り上げられるスペインもまた、イタリア以上に地方性を保っている。本文に即せば、「臨海の各県は自らの活力を意識していたし、自治のための率先性も十分だったこととて、いずれもスペインの他の部分から身を離し、独立独歩を志向する傾向をそなえた」ということになる¹⁹⁾。スペインは1868年の軍事クーデターによるイザベル2世退位から1874年の王政復古まで、「革命の6年間」²⁰⁾とよばれる政情不安期にあり、地方の特権を重視するカルリスタやカントナリスタ²¹⁾による反乱や蜂起も各地で起きていた。その中で第一共和政(1873~74)の「スペイン共和国が一時期設けた連邦制度は、同国の地理と住民の歴史からみて、まったく正当化できるものだった」と評価し、内戦を否定しながらも、「均衡の最大の条件のひとつは、風土の違いと、その結果としての多様な習俗により、県のあいだに引かれてきた境界を尊重することだ」(680-681頁)と主張している。「革命の6年間」の経緯は同章末の「政府と行政」の節で詳しく述べられ、「スペイン史を理解するには、神の恩寵のもと「自らの良心のみに責任を負う」絶対君主が人民代表を招集し、その諸特権と自由を遵守することを誓ういっぽうで、いわゆる立憲君主のほうが、現在のところ一切憲法なしで済ませ、思いのまま、というよりむしろ側近たちの望みのままに支配することをやめてい

ないという大きな皮肉を念頭に置かねばならない」(923-924頁)と説いている²²⁾。

執筆当時には、綿工業をはじめとする産業活動が盛んで、ルクリュが「スペインのランカシャー」と表現したカタルーニャ地方(841-842頁)など諸地方に対し、「諸関係の結び目になり、統治の営為が発出するのは、この地域を描いてなかった」マドリードの優位性(718頁)が高まりつつあった。フェロスとよばれる地方特権が長く認められてきたバスク地方の「まったく特別な地位が長期にわたるのが不可能であるのは明白」であり、「近代産業は、商業や旅行とともに地方的な習俗を変え、隣人の言葉を教え、故習を消し去ってゆくださう」と予言している。ただし、フランコ没後のスペインにおける方向性の反転、つまり地方分権(あるいは地域主権)志向の再生によって、「2~3世代のうちにバスク語はヨーロッパの生きた言葉のリストから除外されるだろう」(876-879頁)との見通しは外れた。

歴史をさかのぼると、スペインも早くから地中海文明の恩恵に浴し、例えば、メノルカ島(バレアレス諸島)の港町マオンの名は、「カルタゴ人創建者」マゴ(ハンニバル末弟の將軍)に因む(819頁)。やがてローマの属州となるが、セビーリャ近郊にあったローマ都市イタリアカが、トラヤヌス帝・ハドリアヌス帝・テオドシウス1世を輩出する(767頁)など、単なる被支配地という存在ではなかった。

「アフリカはピレネー山脈に始まる」(663頁)という性格を強めたのが、中世のイスラム教徒による支配である。ことに「南スペインは、気温、湿度、大気の運動の諸条件がモロッコの田園部と同一」であり、「アンダルシア地方とベルベル諸国の歴史的関係がひんぱんだったのは、単に陸地の近さだけでなく、そのような「気候の類似も理由の一斑である」(742頁)。アンダルシア地方には、「グラナダを目にしたこと無き者は、いまだ何事をも見ぬ者なり」との諺が引かれるアルハンブラ宮殿(759-762頁)や、コルドバの「世界に比類なき壮麗なメスキータ、すなわちモスク」(764-765頁)などが残された。他にも、サラゴサ(アラゴン地方)の「ムーア人のアルカサル{城}、すなわちアルハフェリア宮殿」(843頁)、その南方テルエル(同地方)の「[[知られざるスペイン]」のな

かでも屈指に興味深い」という「アラビア風の塔」(844-845頁)²³⁾、「半ムーア的な様式」をそなえるマヨルカ島(バレアレス諸島)パルマの建築(816-817頁)など、イスラム文化の影響を受けた都市建築物は数多い。同じマヨルカ島には、「アセキア、すなわち島内の田園全域に枝分かれするアラブ人起源の水路」もあった(815頁)。バレンシア地方²⁴⁾には「スペイン国内で最も有名なウエルタ〔灌漑農地〕」があり、その「体系的な大工事を施したのはアラブ人らしい」。水利用調整のため、「8本のアセキアそれぞれの水番8名が集まって構成」される水法廷が設置され、フーカル川兩岸のウエルタで目立つオレンジは、マルセイユに仕向けられ、「フランス全土の市場で「バレンシア・オレンジ」として売りさばかれ」ていた(788-790頁)。

レコンキスタの完了と新大陸発見は、スペインの諸港に繁栄をもたらした。しかし、「かつてセビーリャ港が他の国内都市の犠牲のもとで享受した独占交易権」は、「産業面の率先性が育つのを許さなかったため、平等な条件で行動せねばならなくなったときには、破滅による均衡に至った」(767頁)。セビーリャにあったインディアス通商院の移転(1717年)先となったカディスも、「長い植民地史にわたり、西インド諸島との貿易であらゆる利益を享受した」が、18世紀末には「スペインは300年にわたる独占貿易の対価として、新世界との貿易を突然に、かつほぼ全面的に喪失」した(772頁)。他方、イスラム教徒の追放は「半島全域が退嬰した全般的な原因」となり、エストレマドゥラ地方ではこれに離農による人口流出²⁵⁾という「まったく別次元の要因が付け加わった」(704-705頁)。南部のシエラネバダ山脈中に位置するアルプハラ地方でも、ムーア人の牧羊地を「受け取ったガリシア地方とアストゥリアス地方からの入植者は、大半が正真正銘の未開段階」にとどまり、「彼らがやったことといえば、森林破壊に限られる」(730-731頁)というありさまであった。

イベリア半島においてイスラム教徒が果たした役割に関し、本章での筆致は概して好意的である²⁶⁾。学問の分野でも、「グアダルキビル地方のアラブ人」の存在をあげ、「彼らは数世代にわたり、数学、工学、医学、哲学におけるヨーロッパの師匠にして教育者だったのであり、その恩義に

異を唱えるのは、まったく忘恩と悪意にほかならない」と強調している。翻ってスペインの闘牛には、「正真正銘の醜聞」、「野蛮な勝負事」と手厳しく、「知性の前進に伴い、もろもろの陋習がやわらぐこと」(917-918頁)を期待している。「本国と、その娘である旧植民地は、むきつけな力による紐帯を切り離したことで得をしたのだ」と、ラテンアメリカ諸国の独立による益を説き(918-919頁)、新大陸のスペイン語圏の広さから、「ヨーロッパ国民のうち、人類の諸民族の運動における卓越をイギリス人やロシア人と争う野心を抱き得るのは、唯一スペイン人だけである」(922頁)との見立ては、今や現実のものとなっている²⁷⁾。

最終章で取り上げられるポルトガルでも、イスラム系やユダヤ系などの民族的要素がみられ、哲学者スピノザが「ポルトガル系ユダヤ人の出自だった」こと(933頁)も紹介される。南西端のサグレス岬について、そこに航海学校を設けたとされるエンリケ航海王子に思いをよせ、「歴史地理学の観点からみて、これほど興味深いヨーロッパ大陸の端はほとんどない」(981頁)とし、リスボンが「大西洋方面に対する正真正銘のヨーロッパの偵察拠点」になるとともに、世界にまたがる海洋帝国を築き上げた。しかし、16世紀末期には、「大きすぎる帆を張った小舟にも似て、強国ポルトガルはだしぬけに転覆し」、繁栄はスペインやオランダに移っていった(967-968頁)。繁栄期のポルトガルは、「ヨーロッパに対する最大の魚類供給国」でもあり、14世紀末期のリスボンが「イギリス諸島沿岸での漁業権を獲得」していたことについて、「グレートブリテンの住民に対し、ポルトガル人が産業面での創始者だったというのは、現在ではなんと不思議にみえることか」(977頁)と、栄枯盛衰を物語っている。

1703年、イギリスとのメシュエン条約締結以降、北部ドウロ河谷でのポートワイン生産が盛んになり、「ほぼ全量がイギリスや英領植民地、アメリカ合衆国に仕向けられ」ていた。ただし、「世界で「ポートワイン」として飲まれるアルコール飲料のうち、ポルトガル産がごく一部を占めるにすぎないこと」も付言されている(947-948頁)。リスボン周辺ではヤシ園や果樹栽培がみられ、「オレンジは数か国語、さらにはエジプトでさえ「ポルトガリー」の名で呼ばれており、ま

るで人間がこのすばらしい黄金の林檎を初めて目にしたのは、ルシタニア {ポルトガルの古称} 地方だったかのよう」であった(970-971頁)。なお、執筆当時のポルトガルは、「1826年のいわゆる「憲章」を1852年に改定した基本法」にもとづく「世襲制の立憲君主制」(995頁)であった。

19世紀後半は、イタリアやイベリア半島から各地への出稼ぎや移住が盛んな時期でもあった。近距離ではイタリアのピエモンテ人が「マルセイユほかの南仏都市」で「職場をともにするフランス人作業員にとっては、賃金を引き下げる競争相手なので、嫌われる対象」(378頁)であり、スペイン北西部のアストゥリアス人²⁰⁾やガリシア人は、「郷里で得られぬパンを求めて外地に大量に移住しなかったら、もろもろの生活物資と消費が均衡するのは飢饉によるしかないだろう」という状況下、半島の大都市に「ひっきりなしに家族ぐるみで移住」していた(902頁)。イタリア南部の「いくつかの県は住民が南米に出て行き、急速な人口減少」が見込まれる状況(525頁)にあり、スペインのプエルトデサンタマリア(カディス対岸)から「送り出したアンダルシア移民の多さ」によって、プエノスアイレスの住民は「ボルテニョス」とよばれていた(769頁)。カタルーニャ人も「国内諸県に赴き、地元民が駆逐できずにいる資源を活用して、「ほぼ必ず致富に成功する」ほか、フィリピン・プエルトリコ・キューバへの入植者も多かった(842頁)。さらに、バレンシア地方やムルシア地方では、活発なアルジェリアへの移住により、「数世紀にわたる空白を経て、ムーア人の子孫であるキリスト教徒と、兄弟分であるムスリムとの類縁関係が再び結ばれた」(797-798頁)。

デヴィッド・ハーヴェイは、その著『コスモポリタニズム』の掉尾を、ルクリュエ臨終時の公開書簡で飾っている。そこでルクリュエは、理性をもつ自覚的な革命家にとって、「正義と連帯を推進するその努力の一つ一つが、正確な知識と、歴史学、社会学、生物学の包括的理解に依拠するものなのである」と言い残している²⁰⁾。本評冒頭に記したように、全19巻の『新世界地理』を単著で刊行したのは、当時の状況のしからしむところであったが、結果的に卓抜した一人の学者が当時の世界を見渡したことは、本シリーズを比類のない高みに押し上げているといえる(むろん、執筆の

進行とともに、著者の目も磨かれていったであろう)。すでに第2期セクション(5巻)の刊行も始まっており、さらなる訳業の進行に期待したい。(三木一彦)

〔注〕

- 1) 既刊分は以下の通り。①エリゼ・ルクリュエ著、柴田匡平訳『ルクリュエの19世紀世界地理 第1期セクション1 東アジア—清帝国、朝鮮、日本—』古今書院、2015、814頁。②同上著・訳『同上2 北アフリカ第二部—トリポリタニア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ、サハラ—』同上、2016、878頁。③同上著・訳『同上3 アメリカ合衆国』同上、2016、831頁。④同上著・訳『同上4 インドおよびインドシナ』同上、2017、917頁。上記への拙評は、①歴史地理学58-3、2016、39-43頁。②同上59-3、2017、31-34頁。③同上60-2、2018、23-29頁。④同上61-2、2019、41-47頁。
- 2) フランスにおける世界地誌編纂の略史や、ルクリュエ三部作については、前掲1) ①の拙評39頁でふれた。
- 3) この環境可能論の立場が、後にフランス地理学の牽引者となるヴィダル＝ド＝ラ＝ブラーシュに引き継がれたとみることもできよう。なお、フランス地理学の業績をまとめたフェーヴル著、飯塚浩二・田辺 裕訳『大地と人類の進化—歴史への地理学的序論—上・下』岩波文庫、1971～72にも、ルクリュエの著作が幾度か引かれている。
- 4) 自然環境にもとづくヨーロッパの地理的範囲に関する諸説については、T. G. ジョーダン＝ピチコフ・B. B. ジョーダン著、山本正三ほか訳『ヨーロッパ—文化地域の形成と構造—』二宮書店、2005、1-9頁が参照できる。
- 5) ①ジャレド・ダイヤモンド著、倉骨 彰訳『銃・病原菌・鉄—13000年にわたる人類史の謎—下』草思社、2000、311-314頁。上記部分に関し、②デヴィッド・ハーヴェイ著、大屋定晴ほか訳『コスモポリタニズム—自由と変革の地理学—』作品社、2013、371-372頁は、「空間的決定論の中でも最も愚劣な部類に属する」と批判している。

- 6) 「大地はなにか非常に大きなものであり、パシス河(現、リオニ川)からヘラクレスの柱(現、ジブラルタル海峡)までの間に住むわれわれは、大地のなにか小さな部分に住んでいるのである」との文に続いている。プラトン著、岩田靖夫訳『パイドン—魂の不死について—』岩波文庫、1998、156-157頁。
- 7) 訳注によれば、この部分はシュリーマンが1869年に刊行した『イタキ、ペロポネソス、トロイア』(未邦訳)によるものとされる。シュリーマンは、最初の調査旅行(1868~69年)の際、上記3地域を訪れており、シュリーマン著、村田数之亮訳『古代への情熱—シュリーマン自伝—』岩波文庫、1954、41-49頁に、その際のイタキ島の情景がえがかれている。
- 8) マーク・マゾワー著、井上廣美訳『バルカン—「ヨーロッパの火薬庫」の歴史—』中公新書、2017、2-7頁によると、「バルカン」の呼称が定着するのは1880年代以降であり、それまでは本巻の章名にもなっている「ヨーロッパ・トルコ」が一般的であった。また、同書は、カール・リッターが、ドナウ川以南の地域を「ギリシャ半島」と呼ぶことを提案したことにも言及している。実際、本巻では、「バルカン半島」よりも「バルカン山脈(現、スターラ山脈)」の使用例の方が多い。
- 9) 1905年にブルガリア、ルスチュク(ルーセ)のスペイン系ユダヤ人の家に生まれた作家エリアス・カネッティは、生地では多くの民族が共生しており、後にウィーンやチューリヒに移ってから初めてユダヤ人への蔑視を経験したと述懐している。ただその一方、ルスチュクでは、スペイン系ユダヤ人によるドイツ系ユダヤ人への蔑視が存在したという。エリアス・カネッティ著、岩田行一訳『救われた舌—ある青春の物語—』法政大学出版局、1981、4-9・125-126・321-339頁。
- 10) 後のトルコ共和国建国の父、ムスタファ・ケマル(1881~1938)は、サラニカ生まれで、近代的教育を行なうデニメ(隠れユダヤ教徒)運営の学校で学んだ。1908年に青年トルコ人革命が勃発したのもサラニカであった。小笠原弘幸『オスマン帝国—繁栄と衰亡の600年史—』中公新書、2018、260・276頁。
- 11) とくに、イスタンブールのファナル(フェネル)地区に住んだギリシャ系の特権階層はファナリオット(ファナリオティス)とよばれ、「オスマン帝国のキリスト教徒住民の大半に対する政治面、商業面の運営に任じた」が、ギリシャ独立戦争勃発後は衰退した。
- 12) 前掲8) 177頁は、サン＝ステファノ・ベルリンの両条約が結ばれた1878年を「列強によるバルカン支配の頂点」と表現し、それに続く30年間をその崩壊期としている。
- 13) 原著が刊行された1875年、オスマン政府は外債の債務不履行を宣言し、事実上破産した。前掲10) 243頁。
- 14) 戦間期に外交官としてトルコに駐在した芦田均は、19世紀中期以降のバルカン半島における「民族解放の渦巻」について、「之が解放に努力を惜しまなかつた列強の諸政府は斯くしてトルコの勢力を殺ぎ、或はバルカン地方に自己の覇権を拡張せんとする意図に出たものであつて、必ずしも自由精神の十字軍の熱情に駆られた行動と見ることは当たらない」と分析している。また、欧州列強の攪乱がなければ、「バルカン民族の進歩発達は『バルカン人のバルカン』と称する理想に向つて徐々に接近しつつあるものと云つて大過ないであらう」とも述べているが、その実現は今なお道半ばといえよう。芦田均『バルカン』岩波新書、1939、7-8・36頁。
- 15) エリック・ホブズボーム著、大井由紀訳『20世紀の歴史—両極端の時代— 上』ちくま学芸文庫、2018、86頁は、第一次大戦後の「民族自決」原則にもとづく「国民国家」創設の試みが失敗に終わり、「1990年代にこの大陸を引き裂いた民族的な争いは、ヴェルサイユ条約の報いであつた」と述べている。
- 16) ヘーゲルは、その『歴史哲学講義』の第2部「ギリシャ世界」で、インド・シリア・エジプトなどの神々がギリシャの神話に与えた影響を幾度か指摘している。ヘーゲル著、長谷川宏訳『歴史哲学講義 下』岩波文庫、1994(原著1837)、15・30-31・47頁。
- 17) イタリアとその周辺の非識字率を示す「イタリア諸州の教育水準比較」の図(521頁)も収

- められている。
- 18) イタリアの「南北問題」については、さまざまな形で指摘されている。ここでは、反ファシズム活動によって南部の僻村に流刑となった体験にもとづく以下の作品をあげておく。カルロ・レーヴィ著、竹山博英訳『キリストはエポリで止まった』岩波文庫、2016、400頁。
- 19) 歴史的にも11世紀初頭から「諸都市が自治を行ない、自分たちの慣習を法文化していたこと」により、「イベリア半島の都市は商工業でも、文明でも急速な発展を遂げた」(676頁)。
- 20) ベニート・ペレス・ガルドス著、浅沼 澄訳『フォルトゥナータとハシンター〈二人の妻〉の物語— 上・下』水声社、1997~98(原著1885~87)は、「革命の6年間」のマドリッドを舞台とした長編小説である。
- 21) カルリスタはイザベル2世の王位を認めず、その叔父のドン・カルロスを支持する勢力であり、カタルーニャやバスクを拠点とした。また、カントナリスタはカントン主義と訳される急進的地方分立主義者で、南部諸都市で蜂起した。西川正雄ほか編『角川世界史辞典』角川書店、2001、212・224頁。
- 22) ガリシア地方を舞台としたエミリア・バルド＝バザン著、大楠栄三訳『ロス・クラシコス6 ウリョアの館』現代企画室、2016(原著1886)、273頁には、革命の「渦の底流」で、「絶対王政」と「当時、民主的王政であるかのように偽装していた立憲王政」の「ふたつの強力な体制がせめぎ合っていた」とある。
- 23) レコンキスタによってキリスト教徒の支配下に入ったイスラム教徒を「ムデハル」とよび、彼らによるムデハル様式は、サラゴサ・テルエルなどアラゴン地方の代表的な建築様式となった。前掲21) 933-934頁。
- 24) 当時におけるバレンシア地方の伝統的な村落生活を活写した作品として、blasco・イバニェス著、高橋正武訳『葦と泥 付 バレンシア物語』岩波文庫、1978、414頁がある。なお、『葦と泥』の原著刊行は1902年である。
- 25) 人口流出の一因として、「コルテスやピサロ兄弟など、エストレマドゥラ地方の出身者が赫々たる武勲を新世界で成し遂げると、同郷の勇み肌の若者は誰もがその後を追った」ために、「平穏な農村暮らしは馬鹿にされた」ことがあった。
- 26) 第8章「イタリア」でも、地理学者アル＝ドリーシーのいたシチリア島(563頁)、ドームヤシの根を食用にする住民が「ムーア人も同様」と紹介されるサルデーニャ島(606頁)など、イスラム教徒との関係に目が向けられている。なお、W.モンゴメリ・ワット著、三木 亘訳『地中海世界のイスラム—ヨーロッパとの出会い—』ちくま学芸文庫、2008、232頁は、「あまりにも多くをアラブの哲学と科学から学びつつ」あった12~14世紀のヨーロッパでイスラムを無視するための「積極的な補充物がヨーロッパの古典的(ギリシアとローマ) 過去への控訴」(157頁)であったとするなど、本巻全体を通読する上で示唆に富む。
- 27) エリゼ・ルクリュの弟であり、同じく地理学者のオネジム・ルクリュは、1880年に「フランコフォニー-francophonie(フランス語圏)」という言葉を生み出している(小松祐子、ジル・デルメール「フランス語教育におけるフランコフォニー：現状確認、考察と実践(実践報告)」*Revue japonaise de didactique du français*, 4-2, 2009, 155頁)。本巻でのスペイン語圏の指摘は、「言語圏」の考え方の嚆矢の一つとして注目に値しよう。
- 28) クラリン著、東谷穎人訳『ラ・レヘンタ』白水社、1988(原著1885)、798頁は、アストゥリアス地方の州都オビエド(作中ではベツスタ)をモデルとした小説で、当時のベツスタにアメリカ移住帰りの成金たち(貴族たちは「ベスブッチ族」とよんでいた)による新興住宅地域(同じく「インディアスの植民地」)のあったことが描写されている(96頁)。なお、ルクリュも寄稿していたフランスの雑誌『両世界評論』がベツスタの貴顕倶楽部の読書室におかれていたとの記述もあり(116頁)、当時の学問と現実社会との交流の姿を垣間見せている。
- 29) 前掲5) ②499頁。